

令和八年度入学者選抜学力検査本試験問題

国語

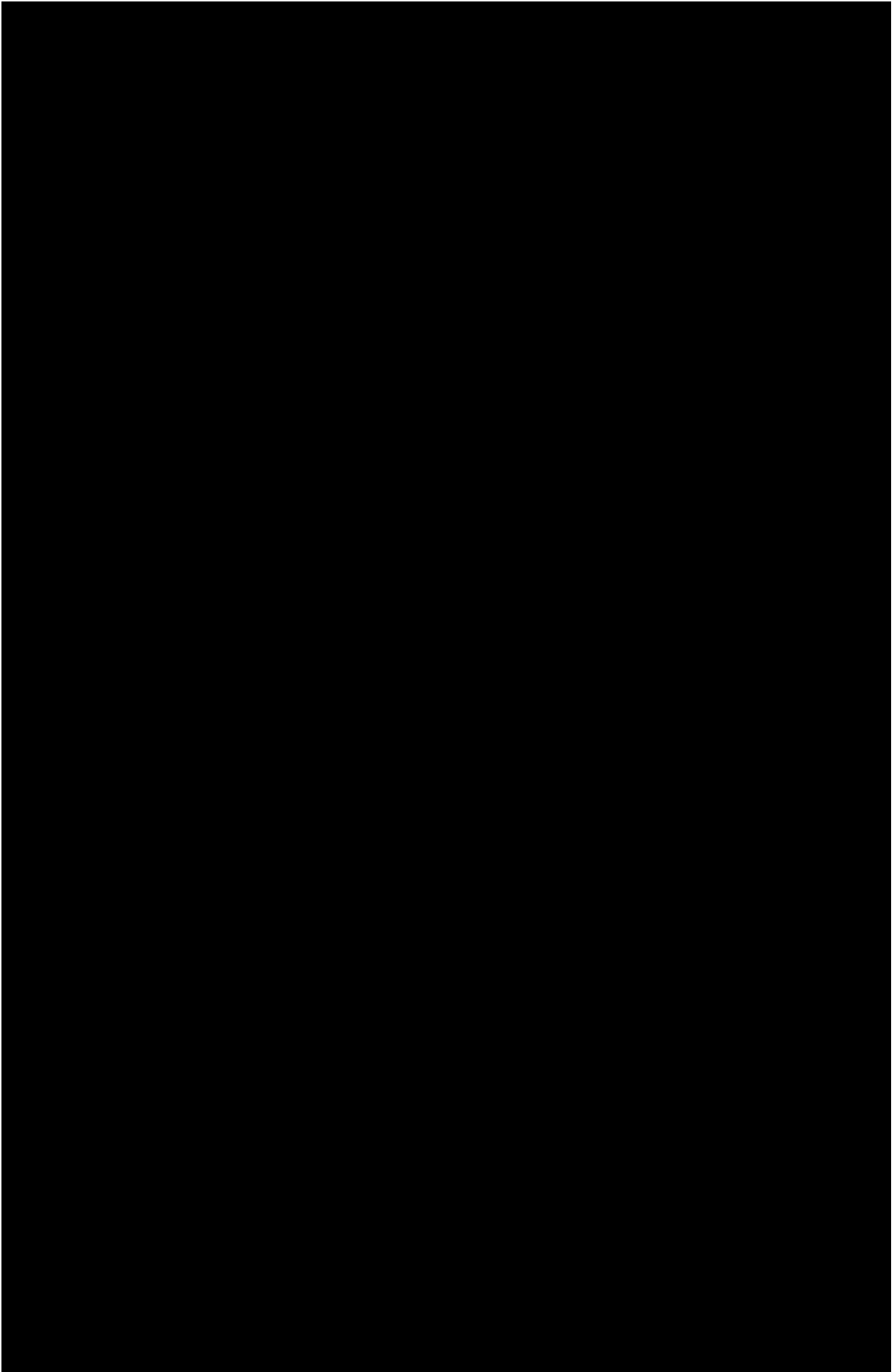
(配点)

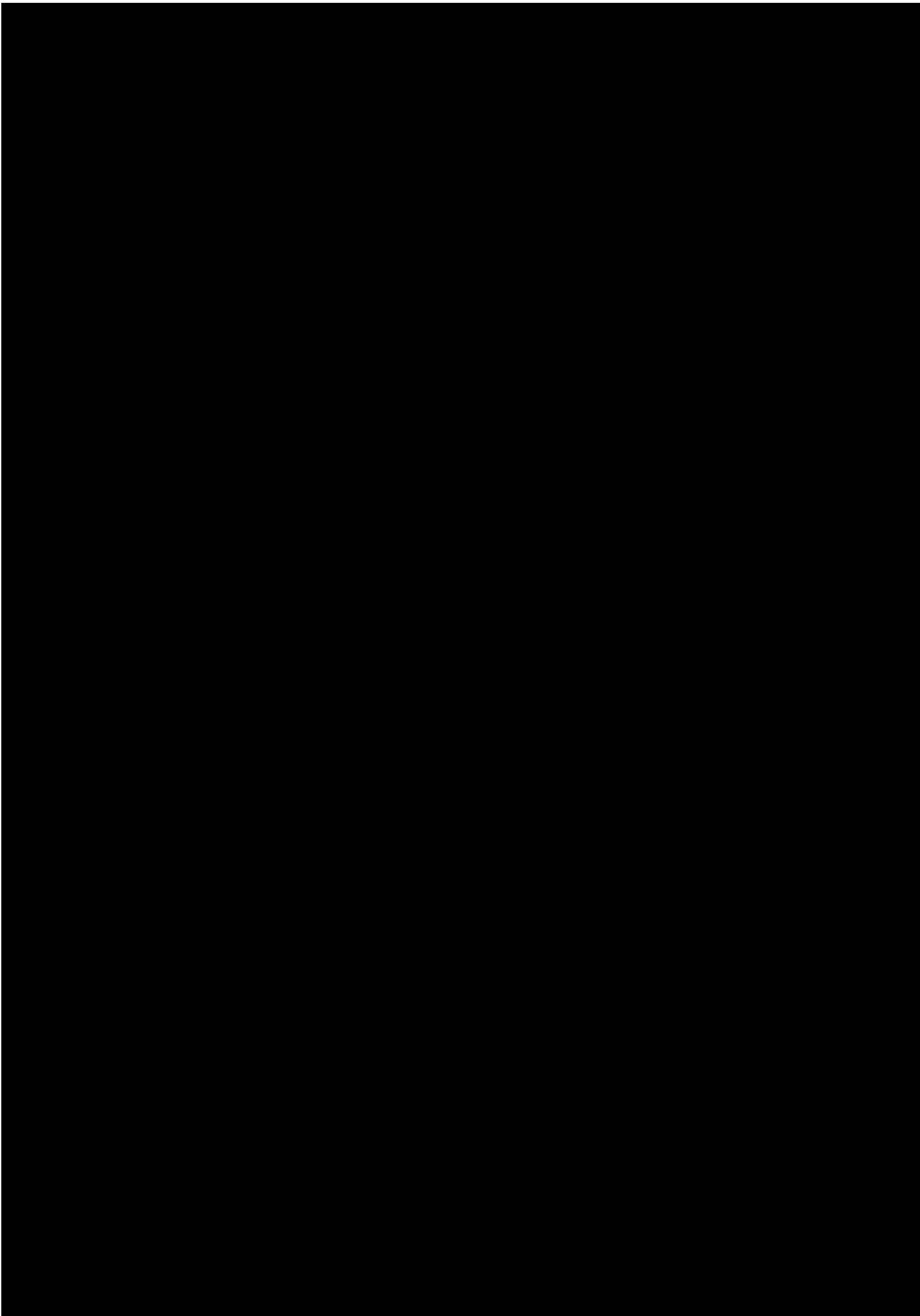
1	31点
2	39点
3	30点

(注意事項)

- 1 問題冊子は指示があるまで開かないこと。
- 2 問題は一ページから二十二ページまでである。検査開始の合図のあとで確かめること。
- 3 検査中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、静かに手を高く挙げて監督者に知らせること。
- 4 解答用紙に氏名と受験番号を記入し、受験番号と一致したマーク部分を塗りつぶすこと。
- 5 解答には、必ず**H Bの黒鉛筆**を使用すること。なお、解答用紙に必要事項が正しく記入されていない場合、または解答用紙に記載してある「マーク部分塗りつぶしの見本」のとおりマーク部分が塗りつぶされていない場合は、解答が無効になることがある。
- 6 一つの解答欄に対して複数のマーク部分を塗りつぶしている場合、または指定された解答欄以外のマーク部分を塗りつぶしている場合は、有効な解答にはならない。
- 7 解答を訂正するときは、きれいに消して、消しくずを残さないこと。

1 次の文章【Ⅰ】、【Ⅱ】を読んで、後の問いに答えよ。







問1 本文中の、度肝を抜かれる、セオリーの意味として最も適当なものを、それぞれ次のアからエまでのの中から一つ選べ。

- (a) ア とても感動させられる イ ひどく消耗させられる ウ ひどく驚嘆させられる エ とても落胆させられる
(b) ア 決まったやり方 イ 直感にもとづく考え ウ 自由奔放な思想 エ 偶然性を考慮した計画

問2 本文中の、わけだ、歌だ、微笑んだ、いるのだの中で、「だ」の文法的意味が他と異なるものを一つ選べ。

- ① わけだ ② 歌だ ③ 微笑んだ ④ いるのだ

問3 本文中に、逆手にとつてとあるが、どういうことか。それについて述べた次の説明文の ア、イ、ウ、エに当てはまる表現の組み合わせとして最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

〈説明文〉 白露や夢は ア に儚さのたとえとして用いられてきたが、和泉式部は イ を強調して詠むために、ウ それらを永遠の長さをたとえるものとして使用したということ。

- ア A 感覚的 B 恋人との逢瀬の長さ C そのまま
イ A 伝統的 B 恋人との逢瀬の短さ C あえて
ウ A 感覚的 B 白露や夢の美しさ C あえて
エ A 伝統的 B 白露や夢の素朴さ C そのまま

問4 本文中に、隠れているものが大きいほど、氷は輝く。⁽²⁾とあるが、どういふことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 具体的ですぐれた描写を目指しつつ、印象的な比喩を意識的に用い、無意味な重複等を徹底的に避けることでこそ、素晴らしい「短歌」が生まれるということ。

イ 古歌の知識を踏まえ、自らの人生経験の中から詠むものと詠まないものを悩みながら取捨選択することでこそ、素晴らしい「短歌」が生まれるということ。

ウ 自分の思いを言葉にしたいという衝動を持ちつつ、人生を自ら歩み深く味わいながら歌を作り続けることでこそ、素晴らしい「短歌」が生まれるということ。

エ 人生経験を元手に、そこに大幅な脚色や虚構を交えて作り続けることでこそ、古歌の伝統に合致するような素晴らしい「短歌」が生まれるということ。

問5 本文中に、和泉式部についての同時代批評⁽³⁾とあり、その具体例として紫式部による批評が紹介されているが、その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 紫式部は、和泉式部が口にくわえて詠んだ歌に「をかしき一ふし」があると認めつつ、古歌の知識や和歌の心得が不足している点を否定的に捉えている。

イ 紫式部は、「口にいと歌の詠まるるなめり」と述べ、和泉式部の歌が、内容的に未熟ながら多くの歌人たちに読み継がれてきたところは高く評価している。

ウ 紫式部は、和泉式部を「はづかしげの歌よみ」と評価し、彼女の作風とともに和歌の知識の乏しさや歌人としての未熟さなど全てを否定的に捉えている。

エ 紫式部は、和泉式部が行った他者の和歌への非難や批判が、和歌の素養がないのに的確であることを、「目にとまる詠みそへはべり」と高く評価している。

問6 本文中に、和泉式部の「白露も」⁽⁴⁾が、恋部の最終に置かれたとあるが、それはなぜか。【Ⅱ】の文章から読み取れるその理由として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 恋の歌を多く詠んできた和泉式部であったが、この歌ではあえて特定の男性を示さなかった点が高く評価できるから。

イ 恋四は、恋の歌を時間的進行という制約で配置したので、永遠の別れを詠んだこの歌こそ最後に置くのに適当であるから。

ウ 恋心を全く語らないという技巧がずば抜けていて、恋の多様な面を詠み重ねた最終章として適切なものだから。

エ 恋のありようの本質を見事に表現している歌であり、様々な恋の歌を収めた恋部の最後に置くのにふさわしいから。

問7 文章【Ⅰ】と【Ⅱ】を読んだ生徒が、「白露も……」の歌について発言している。【Ⅰ】【Ⅱ】の本文と明らかに合致しないものを、

次のアからオまでの中から一つ選べ。

ア 「白露」、「夢」、「この世」、「まぼろし」と儚いものをつらねているけれど、弱々しい印象はあまりないよね。

イ 「も」の使い方を批判した人もいたみただけど、それが気にならないほど魅力的な歌だよね。

ウ 「けり」で終わっているの、別れた男に対する恨みが強調されているよ。さすがに失礼千万な歌だよね。

エ 「たとへていへば」の部分は、しゃべってるみたいにも読めるんだよね。古典和歌では珍しいよね。

オ 「白露」とか「まぼろし」とかって、和歌でよく出てくるよ。使われている言葉は特別珍しいわけではないね。

2

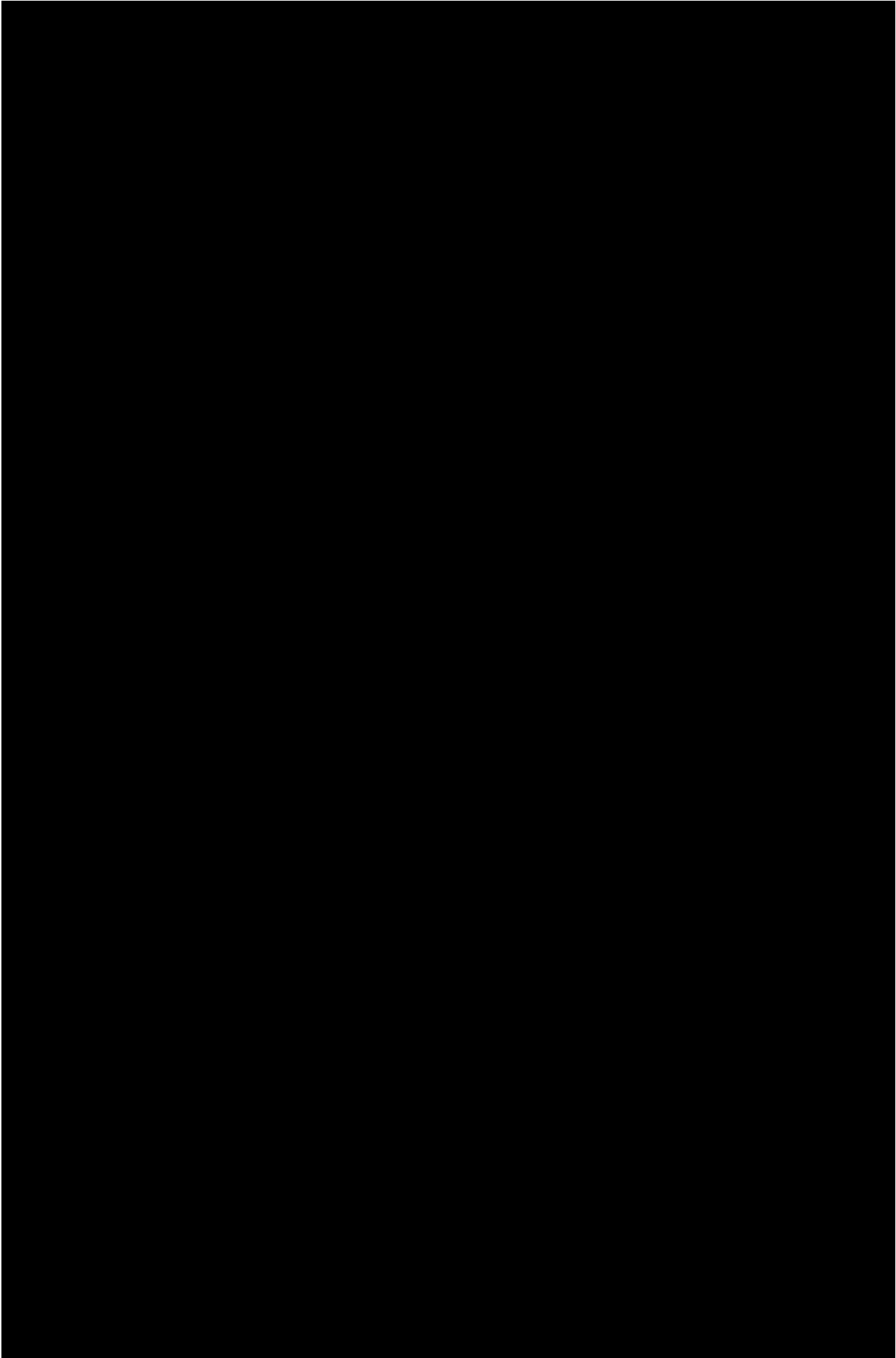
次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

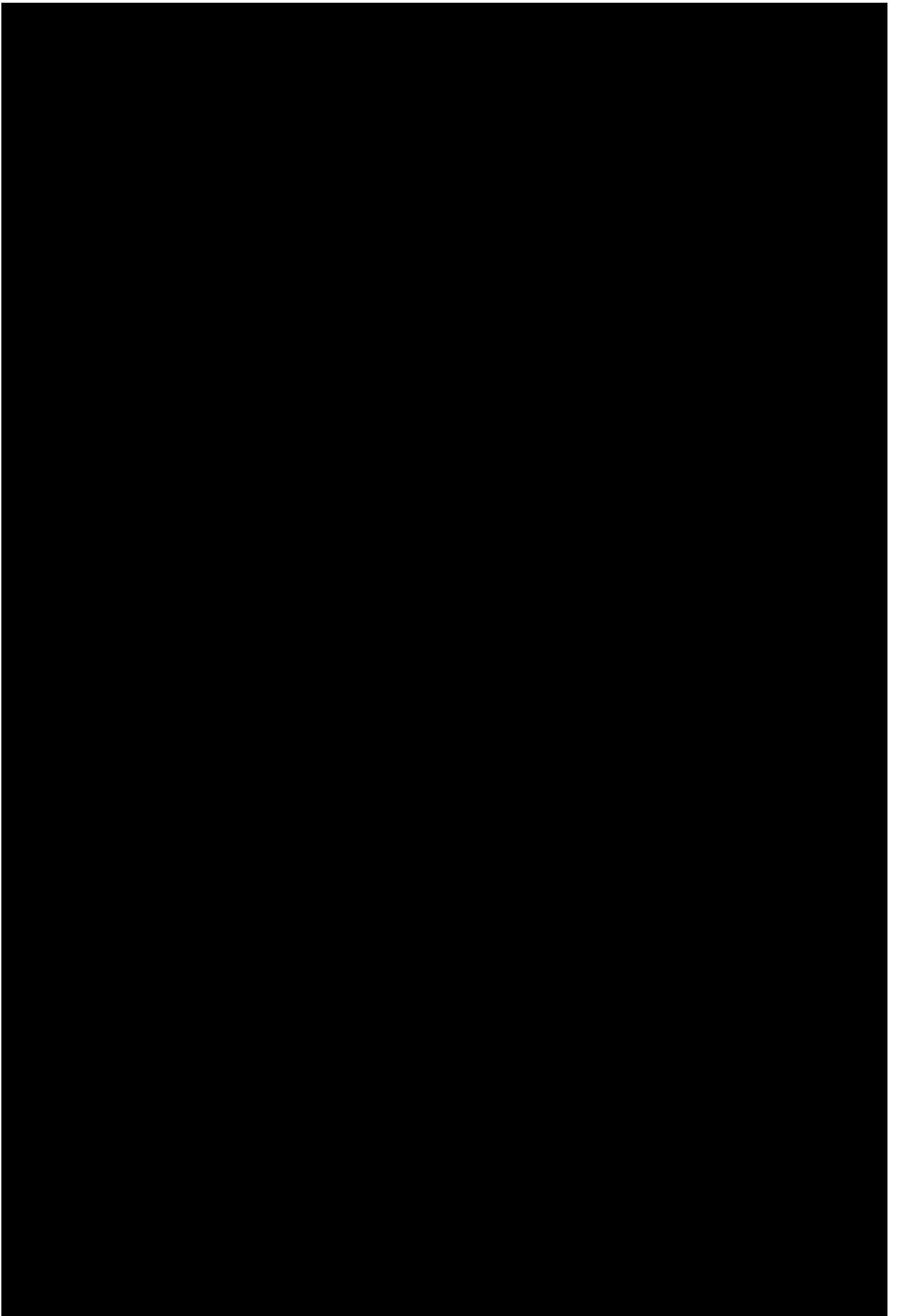
(注1) メタバースは私たちのアイデンティティにどのような影響を与えるのだろうか。それを考える前に、まず、そもそもなぜ私たちがメタバースの

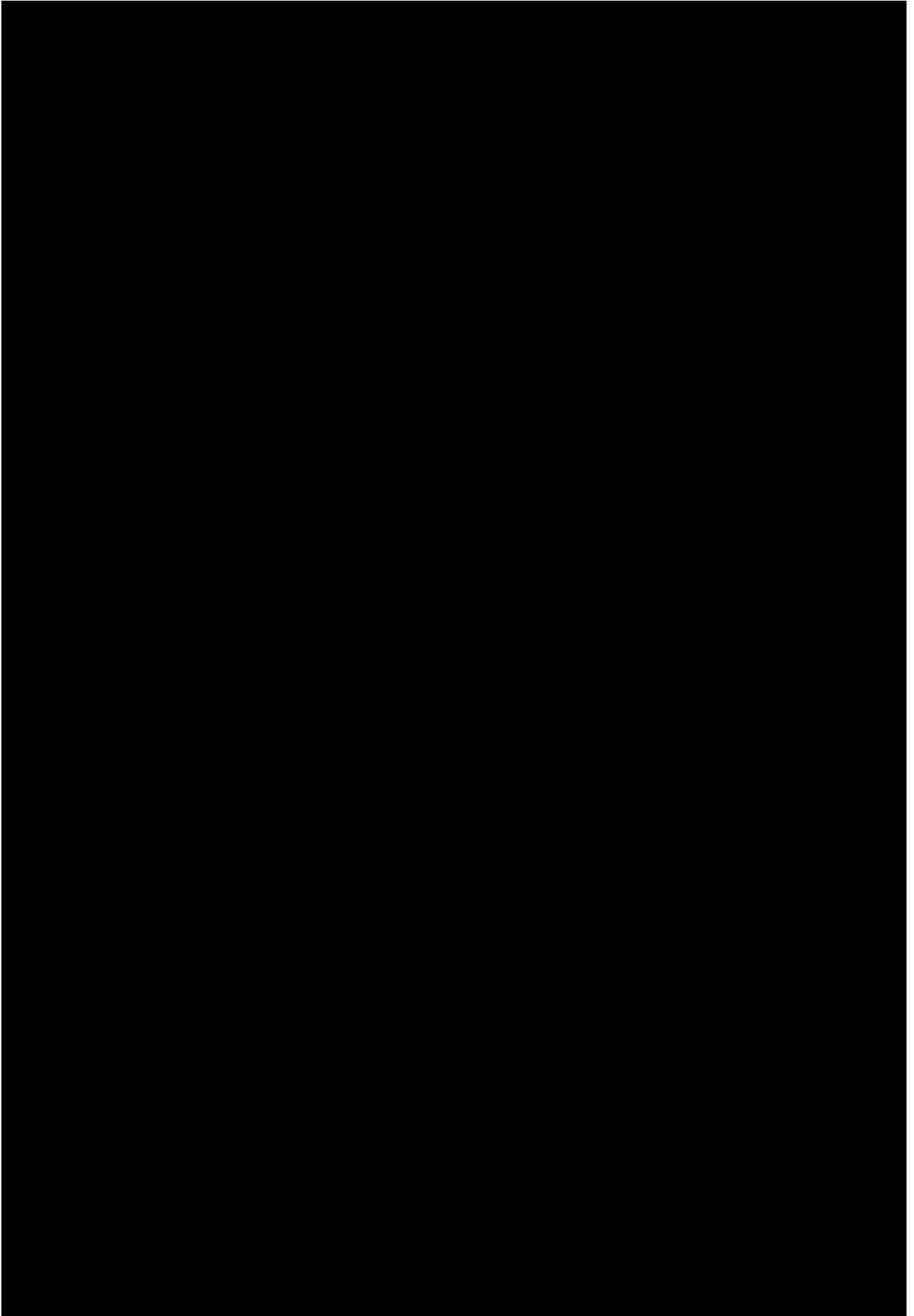
うちに「もう一人の私」を見出みいだそうとするのかを、検討しておこう。もちろんそれは、ただ楽しいという理由に尽きるのかもしれない。しかし、

そもそもなぜ、私たちはそれを楽しいと思うのだろうか。

(注2) 加藤直人はその理由を、「どうしようもない現実からの解放」のうちに見出し、次のように述べている。







問1 本文中の、^①救サイ、^②体ゲン、^③オク病、^④維ジのカタカナ部分の漢字表記として適当なものを、次のアからエまでの中からそれぞれ一つずつ選べ。

- | | | | |
|---|-----|---|---|
| ① | 救サイ | ア | 際 |
| ② | 体ゲン | イ | 斉 |
| ③ | オク病 | ウ | 濟 |
| ④ | 維ジ | エ | 災 |
| | | ア | 限 |
| | | イ | 原 |
| | | ウ | 言 |
| | | エ | 現 |

問2 空欄 **A**、**B**、**C** に入る語として適当なものを、それぞれ **A** から **E** までのの中から一つずつ選べ。ただし、同じ記号は二回使わない。

A つまり **I** それとも **U** また **E** しかし

問3 本文中に、メタバースにおける「私」は、物理空間における「私」の否認によって動機づけられているとあるが、どういふことか。その説明として最も適当なものを、次の **A** から **E** までのの中から一つ選べ。

A 物理空間における「私」は、自分で選んだわけではない環境・身体などに納得しているが、メタバースの中ではより理想的な自分のあり方を求めているということ。

I 自分自身を成り立たせる諸要素は、出生時に選択の余地なく与えられており、物理空間ではそれを受け入れられないが、メタバースの中でならその諸要素を受け入れられるということ。

U 自分で選んだわけではないものによって自分が条件づけられているという不条理を受け入れられないことが、メタバースの中に異なる自分を求めるきっかけになるということ。

E 出生時に選択の余地なく与えられた不条理な現実の自分に向き合い、自分のアイデンティティを形成することが、メタバースの中で新たな自分を発見するきっかけになるということ。

問4 本文中に、メタバースではいきは不可能である。とあるが、なぜメタバースでは不可能なのか。難波の考えとして最も適当なものを、次の **A** から **E** までのの中から一つ選べ。

A メタバースでは、自分で選んだわけではない身体や環境を納得して引き受けるので、そこでは自分だけの格好良さを追い求める必要はないから。

I メタバースでは、与えられた身体や環境と向き合うことなく別の自分を作るので、そこには葛藤しながらよくあろうとする美しさが存在しないから。

U メタバースでは、身体を自分で選んだり環境を作ったりすることができるので、そこでは自分のアイデンティティを形成する必要が全くないから。

E メタバースでは、物理空間における身体や環境のどうにもならなさを無条件に受け入れる必要があるので、そこには葛藤すること自体が存在しないから。

問5 本文中に、人間を単独化された主体として理解するのではなく、他者との関係性のなかで異なりうる主体として理解する とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 人間にはただ一つの「本当の自分」があり、それをよりどころとして、場面ごとにその場に合わせた仮面をつけた自分になることができるということ。

イ 人間は唯一無二の「本当の自分」を持つが、場面や相手ごとに異なる態度を示すいくつもの人格があり、人間はみな多重人格を持っているということ。

ウ 人間は本来「本当の自分」を持つことはできないが、相手ごとに異なる自分を演じることにより、「本当の自分」があると思い込んでいくということ。

エ 人間には「本当の自分」がただ一つあるのではなく、場面や相手ごとに異なる態度を示すどの自分も本当であり、その集合体が自分なのだということ。

問6 本文中に、映し出された「私」は、哲学の概念によって再構成するなら、「私」の「アイデア」の現象である とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 物理空間とは異なる「私」がメタバースに現れても、それは「私」の「アイデア」からたまたま生じた理想的な虚像だということ。

イ 物理空間とは異なる「私」がメタバースに現れても、それも分人化された「私」であり、「私」の本質が表れた姿だということ。

ウ 物理空間とは異なる「私」がメタバースに現れることで、分人化することのない唯一の「私」を出現させることができるということ。

エ 物理空間とは異なる「私」がメタバースに現れることで、複数の「アイデア」から多重人格の「私」が生み出されていくということ。

問7 次のアからエまでの中で、本文の内容と明らかに合致しないものを一つ選べ。

ア 加藤の言う「どうしようもない現実」とは、選択の余地なく与えられた土地・環境・身体などによって、自らのアイデンティティが決定づけられてしまう、という不条理さのことである。

イ 難波は、物理空間において与えられたこの身体を「私」が受け入れることによって、はじめて自分のアイデンティティを形成することができると考えている。

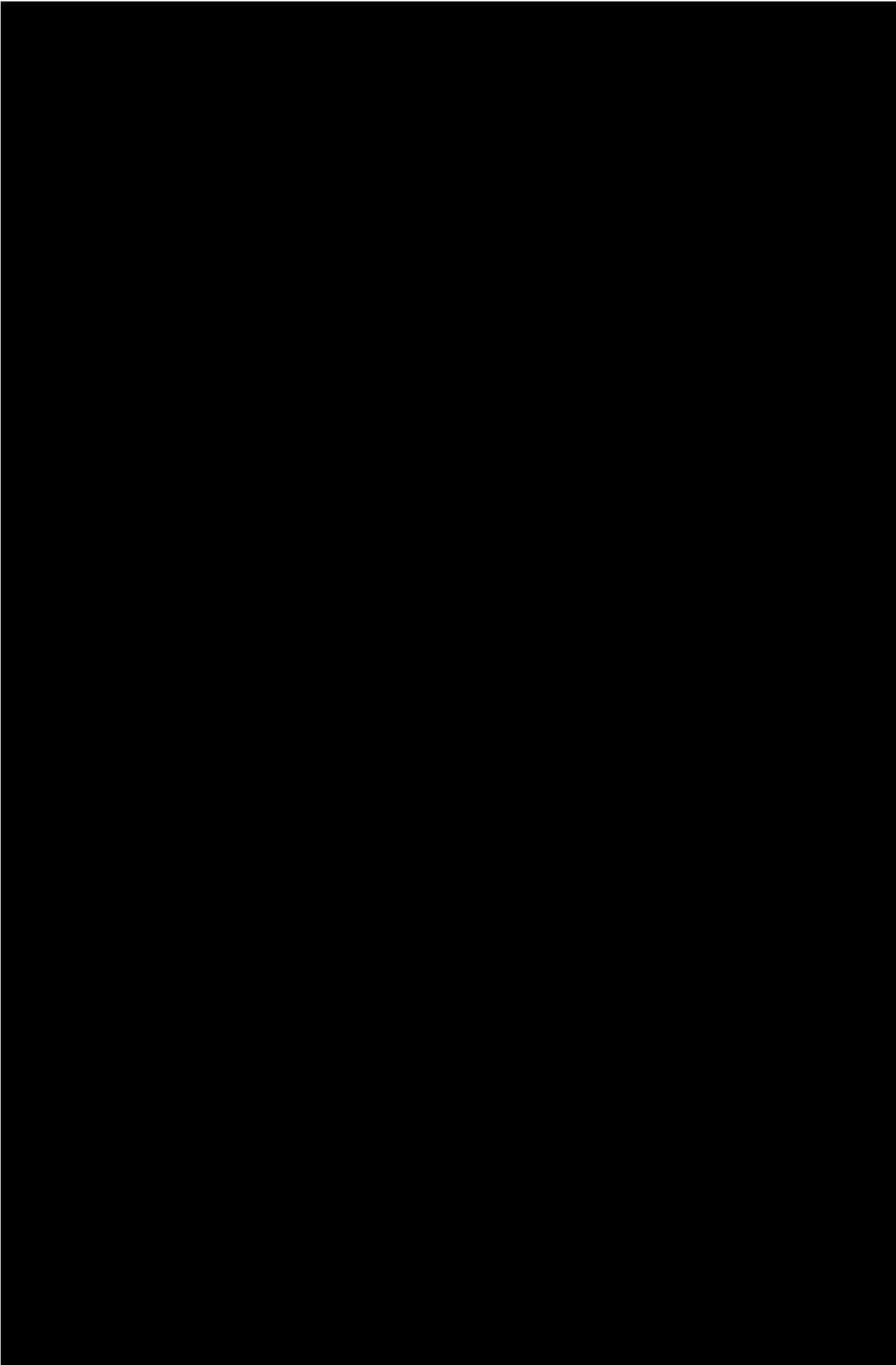
ウ 加藤と難波はともに、メタバースの中で自由にデザインされた「私」は、物理空間における「私」という単独の存在を分裂させたものだと捉えている。

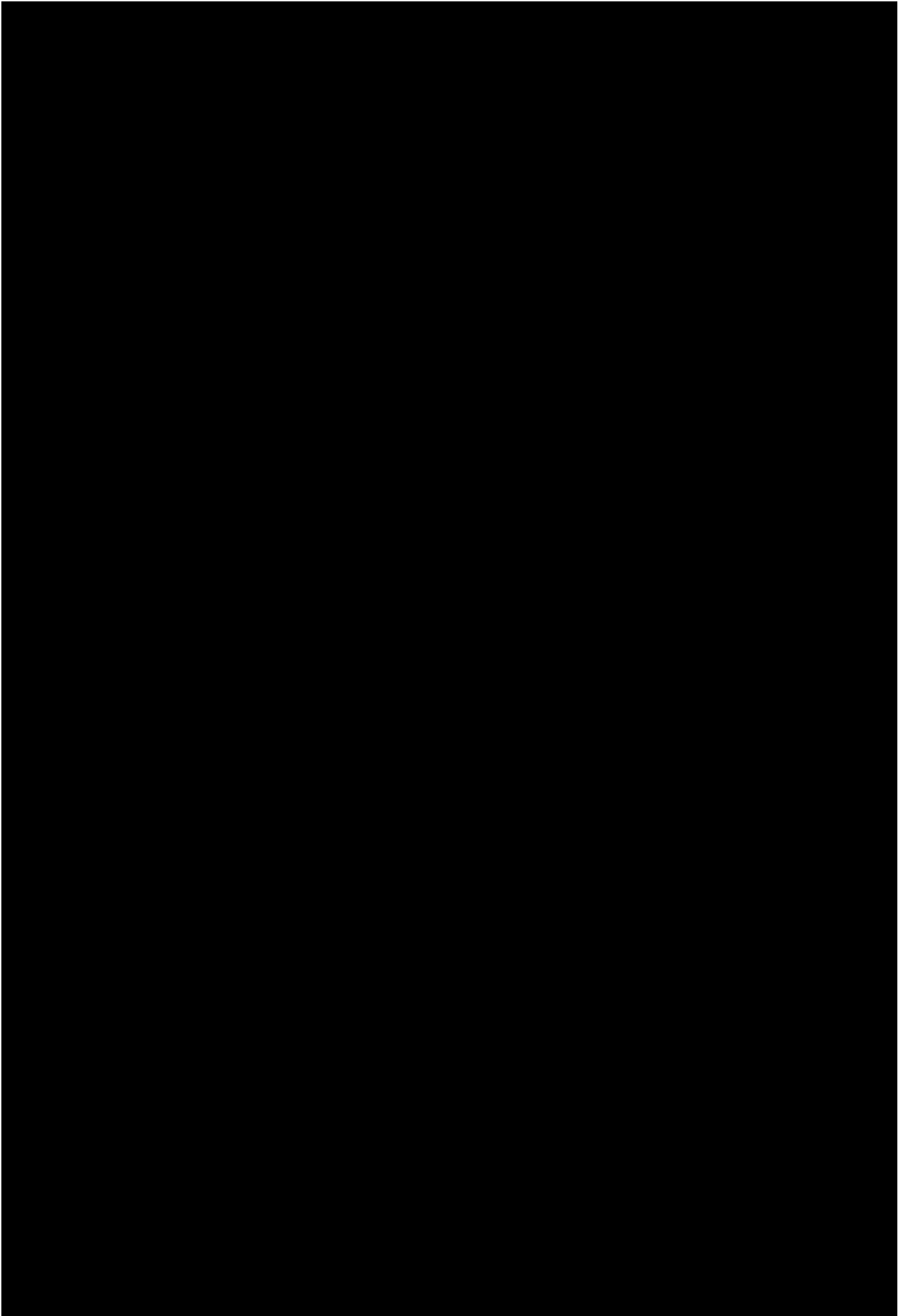
エ ねむは、物理空間における「私」を捨て去り、メタバースの中で理想的な「私」を分人として作りあげることによって、自分のアイデンティティを更新することができると考えている。

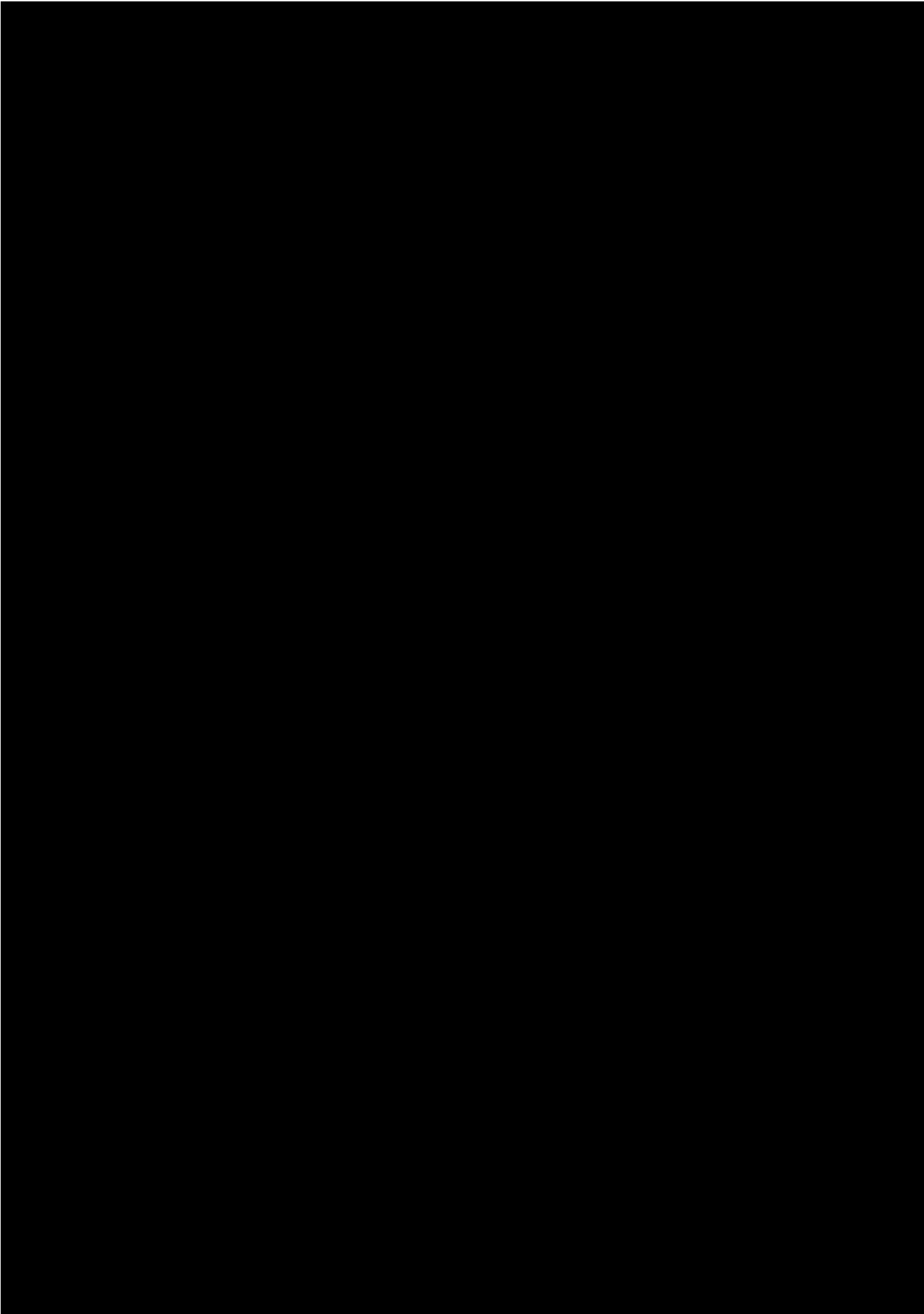
3

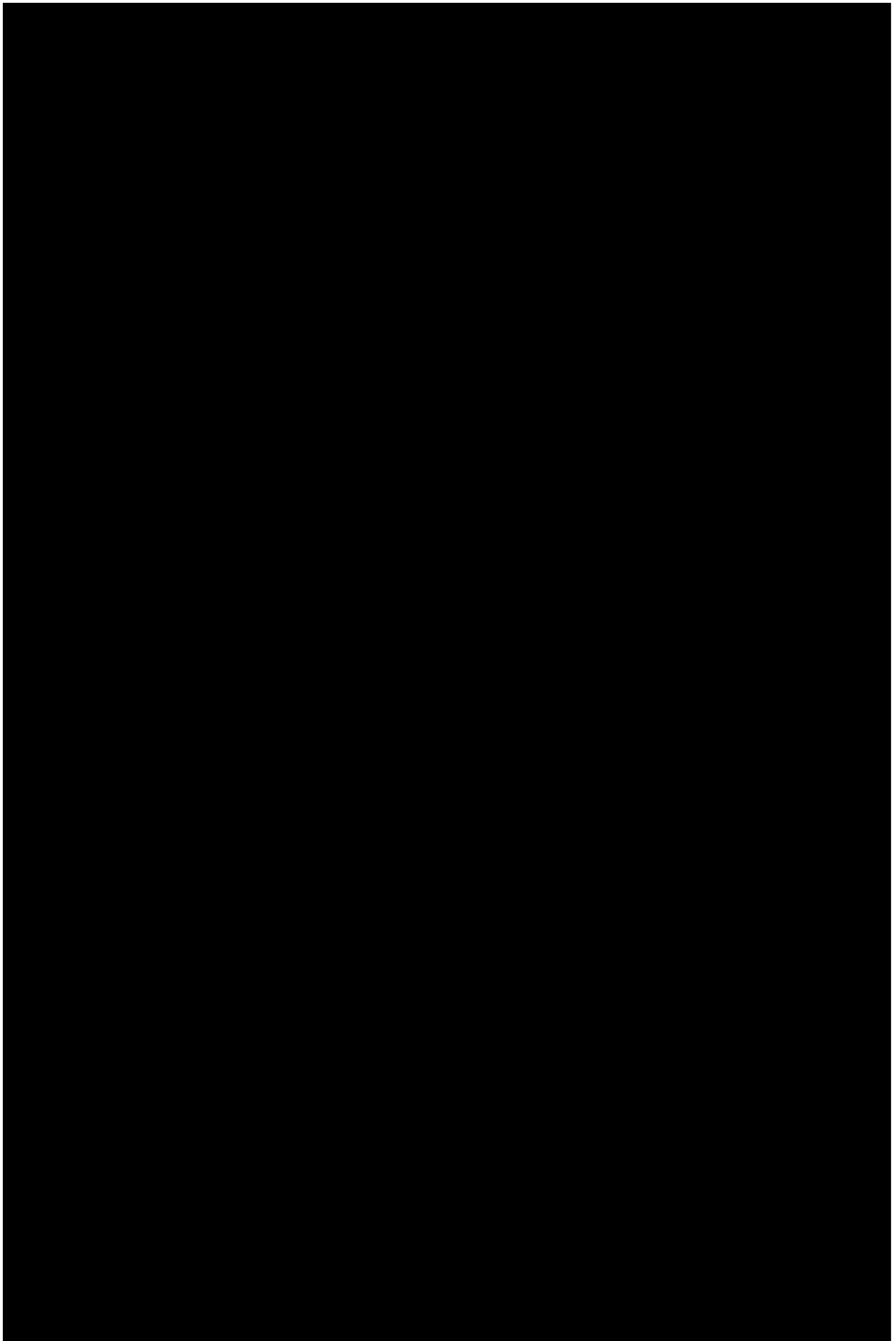
次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

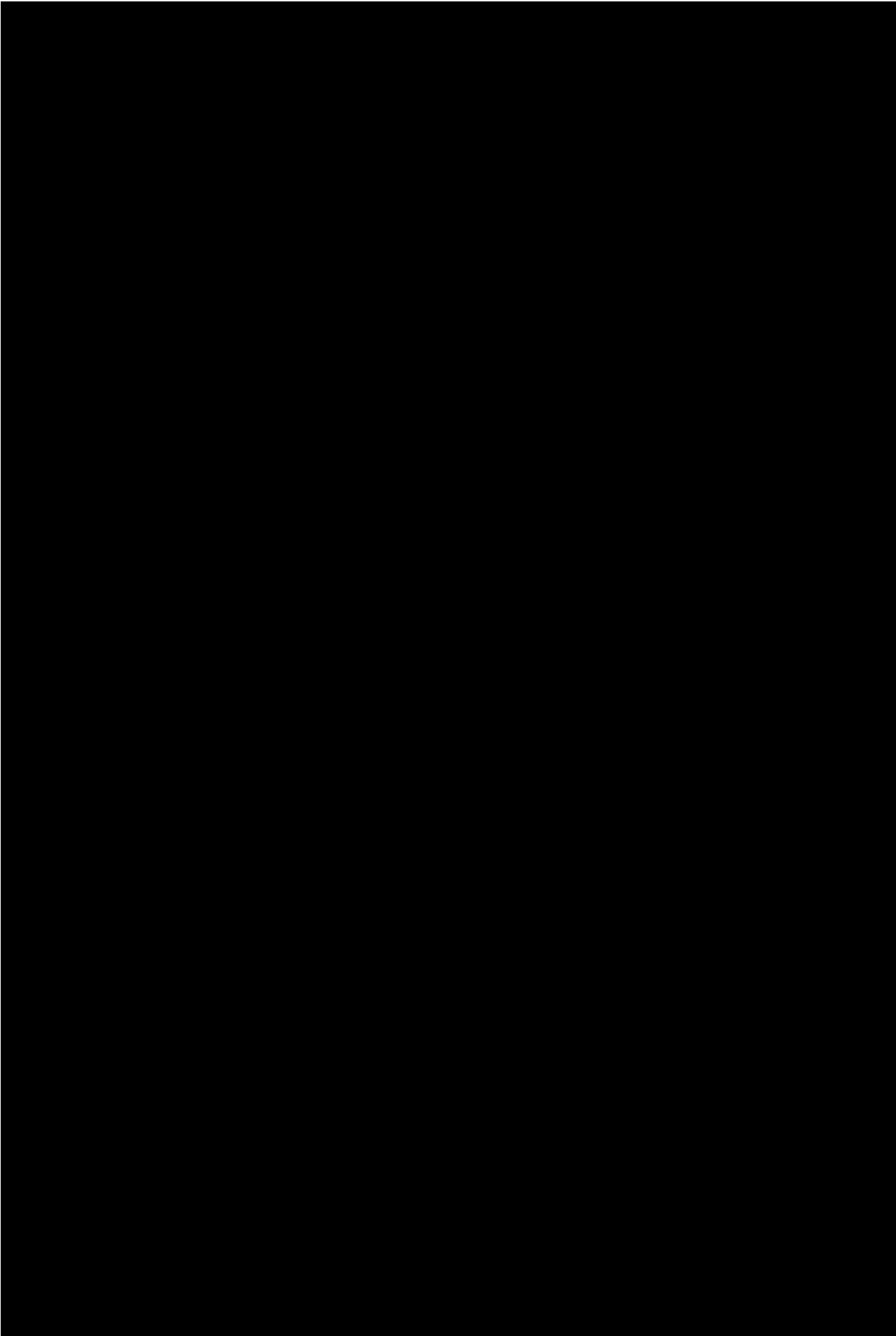
若草ろう学校高等部1年生の木花咲季このはなさきは、偶然入ったカフェのオーナーであるママンの誘いで競技かるたを始める。大会では、読手の「読み」を手話で通訳してもらう必要がある。咲季の担任であり、かつてママンに競技かるたを教わっていた白田先生しろたが通訳を担当することになった。なお、本文中の「へく」は、手話による発話を指している。











問1 本文中に、怪訝な顔、お墨付き^(a) とあるが、怪訝な顔^(a) についてはここでの意味として最も適当なものを、お墨付き^(b) は同様の意味が

含まれる慣用表現を、それぞれ次のアからエまでのの中から一つずつ選べ。

(a) ア 物事の真偽を探ろうとする顔 イ 相手への同情心に満ちた顔

ウ わけがわからず納得いかない顔 エ あからさまに敵意を抱いた顔

(b) ア 手塩にかける イ 型にはまる ウ 竹を割ったよう エ 太鼓判を押す

問2 本文中に、あの……目だ⁽¹⁾。まだ小さいから仕方ないかもしれないけど。とあるが、この時の咲季の心情の説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 耳が聞こえない人が聴者と同じ土俵で挑んだところで、どうせ何もできないだろうという侮りを含んだ視線を感じ、そのような考えが表に出てしまうのは幼さのせいであり、やむを得ないと考えている。

イ 初めて試合に出場する人は、その道の経験者には絶対に勝てないだろうという自信に満ちあふれた視線を感じ、そのような考え方は咲季自身の幼いころにもあったので、許してあげようと考えている。

ウ かるたは本来一人で戦わなければならないのに、咲季には通訳者という味方がいることをうらやむ視線を感じ、幼いうちはその考えが見当違いだとは気づかないので、受け入れるしかないと考えている。

エ 競技の実力ではなく、耳が聞こえないことで周りの注目を一心にあつめる咲季を憎らしく思っている視線を感じ、そのような反抗心は幼い子にはよくあることであり、どうにもならないと考えている。

問3 本文中に、思わず目を見開いた⁽²⁾。とあるが、この時の咲季の心情の説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 白田先生が、聴者に侮られたというわたしの悔しさの根源を理解し、普段は全く使わない不慣れな手話を必死に駆使しながらママンに訴えかける姿に感動した。

イ 手話通訳を見てから取り札に視線を移すという今のやり方のままでは聴者と互角に戦えないというわたしのもどかしさを、白田先生が理解していたことに驚いた。

ウ わたしが試合で不利になっているのは、白田先生の手話の腕前が至らないからであるが、先生はその状況を理解しているのに方法の変更しか申し出なかったことに失望した。

エ 競技かるたの世界では聴者に決してかなわないという事実直面して絶望していたわたしであったが、そんなわたしを懸命に慰めようとしてくれた先生に感謝の念を抱いた。

問4 本文中に、胸が熱くなる。⁽³⁾とあるが、この時の咲季の心情の説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 普段はクールな印象だった白田先生が、わたしが次の試合で実力を全て発揮できるように、短い休憩時間にも必死で準備してくれているのを見て感動した。

イ 未経験者のため競技かるたには詳しくない白田先生だが、試合の空き時間を利用して必死にかかるたの通訳方法を模索している姿を見て、いたたまれない気持ちになった。

ウ わたしが負ける姿を見て、いまさら動画で読み方を確認しはじめた白田先生が、それを指摘されてからあわてて激しく手話で弁解を行ったことに対して、少し怒りを感じた。

エ 次こそは絶対に勝たせたいという一心で、競技のルールの隙を巧妙に突こうとする白田先生のあまりの真剣さに、思わずこちらが恥ずかしくなるほどであった。

問5 本文中に、だけど、口の端がちょっと緩んでいた。⁽⁴⁾とあるが、この時の白田先生の心情の説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 咲季に対しては終始無関心を貫いていたが、咲季の情熱に触れ、できる限りの応援をしようと思った。

イ お手つきにもかかわらずはしゃいでいる咲季の子供っぽい振る舞いに、思わず心がなごんでしまった。

ウ 競技の最中であるため咲季の行動をたしなめたく思いつつも、その活躍を嬉しく思う気持ちを抑えきれなかった。

エ 通訳が上手くいったからこそ咲季は札が取れたのだと自画自賛している自分に気づき、苦々しく思ってしまった。

問6 本文中に、そんな空想⁽⁵⁾ とあるのをきっかけにして、この小説で印象に残った表現について、生徒たちがディスカッションを行っている。

空欄 I、II に当てはまるものを、それぞれの選択肢AからEまでの中から一つずつ選べ。

生徒1 そんな空想って、どういうことなんだろう。

生徒2 直接的には、すぐ前の文の、今日、わたしが散らした星たちが天に上り、神話のオリオンを形づくる。という空想なんだろうけど、試合中にも似た表現があったよね？

生徒3 そうだね。二試合目ではじめて札がとれたときの、漆黒の夜空に、弾けるように星が散った。とか、三試合目のわたしは星を弾きに行く。とかね。

生徒2 最終戦でも、手から星が散り、彗星のように札が飛んでいく。とあるね。こういう空想が試合中に描かれる時の共通点はなにか？

生徒3 I という点じゃないかな。

生徒1 そうか。だから、三試合目からは取り札の暗記に集中することにしたんだね。

生徒2 そうだね。それに気づいてから、わたしにだって勝てる見込みはある……かもしれない。と、勝てる可能性を見いだしているね。

生徒3 私が印象的だったのは三試合目後の、わたしの何かがもの凄い勢いで花開き始めている。の部分だなあ。咲季が自分の才能に気がついた場面だよ。この後から、この勢いなら絶対、絶対勝てる。というように自信を持ち始めているのが感動的だったよ。

生徒1 最終戦を終えた直後やその夜の描写もよかったよね。最終戦は II なんだらうね。

【I】

A 白田先生の通訳が始まるか始まらないかの瞬間、取り札の位置の記憶を頼りにしつつも視線を素早く札に移して、位置を再度確認する慎重さがあった

I 対戦相手も読手も視界に入らないほどに集中して白田先生の指の動きだけを捉えている状況で、場所を暗記した取り札を見ることなく手で払った

ウ 白田先生の指の動きも取り札も全く見ることにない漆黒の世界の中、規則正しく並んだ取り札から、己の直感のみを頼りにして正解の札にたどり着いた

E 白田先生の指文字に反応するよりも先に、対戦相手のわずかな呼吸の変化を感じとり、注意深く相手の手の動きを見てから暗記した取り札に手を伸ばした

【Ⅱ】

- ア 聴者が全力を尽くす姿に刺激を受け、自分も競技に真剣に向き合いたいと感じさせるものだった
- イ 聴者に勝てたということはどうでもよく、競技そのものの楽しさを実感できたことに意味があった
- ウ 聴者と対等の立場で戦って勝ったことに意味があり、それが自分を肯定するきっかけになるものだった
- エ 周囲が自分の勝利を喜んでくれたことで、これまでの努力が報われたように感じられた体験だった

